

近代日本における国民の道德と民衆の教育

——廣池千九郎との思想的影響に着目した共同研究を振り返って——

冬 月 律

目 次

- 一 はじめに…本研究の背景とねらい
- 二 各研究者の研究レビュー…初年度の関連人物研究を中心に
- 三 廣池千九郎思想マップの概要…試作から暫定版の制作に至るまで
- 四 おわりに…課題と展望

一 はじめに…本研究の背景とねらい

本稿では、道徳科学研究所（以下、「道科研」と称す。）の共同研究として平成三〇年度より三カ年計画で取り組んだ「近代日本における国民の道德と民衆の教育」の研究成果を振り返ることを目的としている。具体的には、共同研究者がそれぞれのテーマを設定して個別に取り組んだ内容——冬月律「戦前・戦

中期における神社の道德・教育への役割と影響」、久禮旦雄「近代学問史における道德研究と廣池千九郎」、江島顕一「国民道德運動と社会教育——廣池千九郎と国民道德団体——」と、本研究の成果である「廣池千九郎思想マップ（明治～戦前期）」の作成過程を中心に概観し、課題と展望を述べたい。なお、本稿の性格（共同研究の中間報告）から、本文中の筆者を除く久禮氏、江島氏の研究内容の引用・転載については本人の許可を得た上で、詳細な出典記載は省いていることを先に断っておきたい。

まず、本研究の背景について説明したい。衆知の通り、道科研における廣池千九郎に関する研究蓄積は膨大な量を誇るが、廣池千九郎の研究は時代的背景との関係を重視されており、その点について定例研究会においてもしばしば議論になっていた

る。また、副題にも示したように、廣池千九郎の学者、そして思想家としての形成過程において多くの人物がかかわっていることは言うまでもないが、そのことが筆者をはじめ、共同研究メンバーにとっても最大の関心事でもあった。ただし、三名の専門領域からみれば、法学、教育学、宗教学という具合で、一見すると繋がりそうもない分野であることから、共同研究を結成することに躊躇いがあったのも事実である。しかしながら、道科研で各自取り組んでいる研究において、共通して「時代性」を言及していることから、とりあえずはそれぞれの専門領域、つまり社会教育・学問史・制度と廣池千九郎とのかかわりを探り、その成果をもとに人物関係図を作成してみようということでご合意に至った。

また、特筆すべきは、共同研究メンバーは研究分野を異にするが、時代区分としては、共通して近代（二部中世を含む）・現代を扱っており、言い換えれば三名とも、各自廣池千九郎を同時代かつ連続性に依拠した研究を進めることが可能であるということである。

繰り返しになるが、本研究は三年間の研究成果の一部であり、現在も継続しているが、これまでに個別研究に依拠して語られてきた（取り組んできた）人物研究を補完することはもちろん、廣池千九郎の学問・思想形成にかかわる人物を包括的かつ立体的に表すことができると考えており、そこに本研究の意

義があると思われる。

二 各研究者の研究レビュー…

初年度の関連人物研究を中心に

先述のように、三人の共同研究者は国民の道徳と民衆の教育の視点からの廣池千九郎の位置づけを検討することを目的とした研究を進めた。具体的には、①国民の道徳と民衆の教育（特に社会教育）の観点から、国民道徳運動を推進した、婦一協会や斯道会などといった社会教育団体と廣池千九郎の関係を検討（江島）、②近代学問史、特に大正期における「道徳」研究の事例を検討し、廣池千九郎との比較検討（久禮）、③国家と民衆の見地から政府による神社政策および民衆の信仰生活を検討（冬月）することである。

以下では、平成三〇年度から共同研究者が取り組んでいる個別研究のうち、初年度の個別研究に限定し、研究のねらいと内容、そして課題などの概要を、「共同研究費報告書」（令和元年九月提出）から転載する形で紹介したい。初年度研究に限定したのは、思想マップの形成に関する具体的な検討が始まっている時期で、共同研究者それぞれの関心分野に基づいた研究がもっとも盛んであったことに起因する。ちなみに、三人の共同研究者の研究テーマは先述の通りであるが、実際にそれぞれの

研究者が行なう研究は、共同研究の最終目的が思想マップの構築において必須項目としての人物、制度、組織（社会）に注目して進めている。その点を念頭に入れて、まず主に人物に注目した研究に取り組んでいる久禮旦雄氏の個別研究としては、「柳田國男と平泉澄——自分の言葉で語る」学問を目指して」を取り上げる。

平泉澄の皇国史観（皇国護持史観）と道徳

明治二八年（一八九五）に福井県の平泉寺白山神社の社家に生まれた平泉澄は明治四四年（一九一一）の大逆事件に大きな衝撃を受け、学問の道を志し、東京帝国大学・同大学院を卒業後、東京帝国大学の講師・助教を経て、同教授を務めた。その活動は、大学の講義を中心とし、朱光会（学生団体）・青々塾（私塾）があり、個人的師弟・信頼関係に基づいた軍部との関係も存在した。彼は「学問をします者は、真に日本の道徳を確立せんがために、志を立てなければならぬ」とし（「思想問題について」）、「皇室と国民道徳との関係に於いて、その中心となり、根本となるところのものは、君臣の分」と述べている（「皇室と国民道徳」）。つまり、「国民道徳」を皇室との関係に依拠するものとし、さらに、学問は「国家護持の精神」を持って生きた「古人」「先賢」に学び、自らの中にその思想を復活させることを目標としている。

柳田國男の民俗学（郷土研究）と道徳

明治八年（一八七五）、兵庫県の儒者（医者・神職も兼ねる）の家に生まれた柳田は、明治一八年（一八八五）の飢饉に遭遇し、その後も一貫して農村の貧困の問題と向き合い続けた。彼は東京帝国大学卒業後、農政官僚となるが、その時期の著作においては、都市・農村・山村の協同組合の必要性について説かれ、組合を利用して個人的利益を挙げようとする動きについて「道徳上の制裁」について言及している（『産業組合通解』）。官僚を辞した後、柳田は全国の地域インテリを「郷土研究」（民俗学）というかたちで組織するが、その目的は「即ちその時代の知識・社会観・道徳などを知り、何を目当てに生きてゐたかを、明かにする」ところにあった（『郷土研究の方法』）。そして晩年には日本の社会の内部に存在していた道徳を自分たちの言語で取り出すことの必要性から、国語教育・社会教育の問題についても論じている。

おわりに

平泉澄と柳田國男の道徳観は、基盤を個人（古人・先賢）に置くか、社会（村落）に置くかに相違点がある。しかし、廣池博士の道徳科学とともに、外国（欧米・中国）の輸入ではない、日本独自の「道徳」を構築しようとする試みであったといえよう。

次に、筆者（冬月律氏）による研究として、「近代における「神社中心説」と廣池千九郎の「神社論」をみていく。筆者は主に、国家神道の時代背景に注目し、廣池の神道観に焦点を当てた研究に取り組んだ。

はじめに

廣池千九郎博士が生きた時代は、神道史においてまさに国家神道の時代である。周知のとおり、廣池千九郎は明治四〇年から大正二年までの間、国体の研究の傍ら、神宮皇學館において古代法制、東洋家族制度、国史、歴史研究法、神道講義（神道史、神祇史）を教授しており、当時の講義の記録も多数残されており、それらの資料からは、国家神道の時代を生きた廣池の神道観をうかがうことができる。

本報告は、廣池千九郎の神道観について、限定された神道、いわゆる「国家神道」という時代背景のなかで、神道や神社をどのように捉え、そして神社を信仰する人々に対し、それらとの関わり方をどのように伝えていたのかを、関係資料を取り上げて検討したものである。

廣池千九郎の神道観―神社中心説とのかかわりから―
宗教文化として民衆に広く親しまれていた「神社」は、近代に入ると「国家ノ宗祀」、すなわち国民統制（規範、道徳）のための存在として取り扱われるようになる。

廣池千九郎が神宮皇學館で行っていた神道講義では、神道の性質を「神道は宗教に非ずして、倫理道徳の教えである」とし、その倫理道徳は個人的ではなく、国家的なものであると付け加えている。ほかにも、この時代における廣池関係資料には、廣池の神道観が色濃く反映されているものと考えられる。

また、廣池は、神社は国庫もしくは地方費で其の費用を共進されることから、法律（国家神道の制度）上では宗教ではなく、国家の宗祀として倫理的（国民道徳）に一般国民の崇拜すべき礼拝所となし、神社は礼拝所であって、祈願修法の靈場ではないとするも、（そもそも、神社が祖先の宗教的觀念や倫理的觀念に基づいて創設されたことから）祭典の儀式は古来の慣例に従う者や祈願の意を含む場合もあることをも述べている。また、神社を崇拜することは義務ではあるけれども、それを遂行することで人心の善悪を問うものや強いものではなく、安心立命のようなものであるという。

おわりに

近代における神社は、国家の宗祀であり、神社崇拜が国民の義務、すなわち倫理道徳であるとする神社中心説について、廣池千九郎もそれと一致する立場をとっていることは明らかである。しかしながら、廣池千九郎の「信仰」については、本来人間が持つものでその様相は多種多様であり、それ

を国家が一方的に口出しをすることは間違っていると発言するところに、国家（政府）との「距離感」があると考ええる。それゆえに、政府主導の神社中心説は理想で終わってしまうが、廣池の最高道徳論は道徳から神社崇敬（国家）と信仰（個人）を分離させる（切り捨てではなく、併存させる）ことによって、現代にもそうした廣池の思想が学界・教育界に適用できることに共感する人々がいると思われる。

最後に、江島顕一氏による研究として「近代国家形成と国民道徳―井上哲次郎の『国民道徳論』を取り上げる。江島氏の研究は、主に氏の専門分野である道徳教育の立場から、共同研究においても、近代の道徳に着目していることが特徴である。

問題の所在

「国民道徳論」とは、狭義には明治末期にわが国固有・特有の道徳を徳育の中心に位置付けようと提唱されたものであったといわれている。周知の通り、廣池千九郎が、本格的な道徳研究に邁進していくのはこの時期からであった。本報告では、こうした「国民道徳論」と廣池の道徳論（後に体系化される「道徳科学」（モラロジー）との教育思想的な異同と特質を明らかにするため、まずは「国民道徳論」の代表者たる井上哲次郎の「国民道徳論」の概要と特質を検討すること

を試みたものである。

井上哲次郎の「国民道徳論」

井上の国民道徳論がまとめられたものに『国民道徳概論』（三省堂、一九二二年）がある。井上は、「国民教育」の中心は「国民道徳」の教授でなければならないと主張した。そして、その「国民道徳」とはその国あるいは民族固有の道徳とし、日本の「国民道徳」は、日本の伝統思想に、儒教や仏教の影響が加わって出来上がっていると指摘する。とりわけ、儒教の影響は強く、それは「家族制度」や「祖先崇拜」といった特質を有したものであったという。さらに、日本の「国民道徳」は日本の万世一系の皇統を基礎とする「国体」と密接な関連を有しているともいう。こうして、日本の「国民道徳」は忠と孝の道徳に基盤があるといい、近代国家において、その両者が一致した「忠孝一本」が「国民道徳」として創出されたと論じたのであった。

今後の課題

普遍と特殊というフレームワークから、井上の「国民道徳論」と廣池の道徳論の比較検討が妥当なものを吟味したい。すなわち、井上の「国民道徳論」を整理すると、「国民道徳」とはその国独自の特殊な道徳であり、日本においては、それは「忠孝一本」であり、その究明と敷衍が「国民道徳」の研究の意義であった。一方、廣池は、「最高道徳」と

いう普遍の道徳を志向し、それを「慈悲寛大自己反省」等として提示し、その科学的研究を「道徳科学」の研究とした。こうした道徳をめぐる普遍と特殊という視点から、両者の道徳論の異同と特質をさらに検討することが今後の課題である。

三 廣池千九郎思想マップの概要…

試作から暫定版の制作に至るまで

研究レビューを踏まえた上で、本節では成果物の取り組み、「廣池千九郎思想マップ」（仮称、以下「思想マップ」と称す。）の作成行程および内容構成について概観していきたい。

廣池千九郎（一八六六—一九三八）が、その生涯において、直接・間接を問わず、持ち得た人脈は相応にある。それは、廣池が学徒として指導を仰いだ人や薫陶を受けた人、あるいは廣池の学者としての業績を評価した人やそこに現れた思想に共鳴した人、さらに言えば、著作や言説というものを通して廣池の思想形成に影響を与えた人など様々であろう。共同研究の初年度と次年度には、こうした廣池の人物相関図、換言すれば思想マップを作成することを目的に、その初発として、中津時代、京都時代、前期東京時代、奈良・伊勢時代（一九一五年頃、四九歳）までを射程として整理・作成したものである。これまで

取り上げられてきた人物との関係性を捉えなおすとともに、これまであまり取り上げられてこなかった人物との関係性を明らかにすることを試みた。

（一）思想マップの構成その１（試作完成まで）

まず、図表１「廣池千九郎思想マップ構成人物一覧」と図表２「廣池千九郎思想関連人物マップ」をご覧いただきたい。

構成人物の一覧における人物選定作業については、橋本富太郎著『廣池千九郎』（ミネルヴァ書房、平成二八年）に基づいて、本文中に登場する人物をすべて網羅することから始まった。具体的な作業については、人名索引に掲載してある三二一名のリストを、共同研究者が分担して、実際に廣池千九郎との文脈で言及されているか否かを確かめ、最終的には廣池千九郎の奈良・伊勢時代までの関係人物と見なした五四名を選定し、リスト化することができた。（余談になるが、）どのような関係人物が挙げられるか検討していた段階において、本書巻末の丁寧な人名索引のおかげで思想マップの試作版ができたと言っても過言ではない。実際に共同研究の着想に至った経緯として、筆者が本書を読んでいる最中に共同研究を着想したことも事実である。その意味において、本書は本共同研究を進める上で必須の文献である。もちろん、人物選定の検証作業においては、『伝記 廣池千九郎』（モラロジー研究所、平成一三年）も適宜

図表 1 廣池千九郎思想マップ構成人物一覧

整理番号	氏名	生涯	影響関係区分	直接面識有無
1	福沢諭吉	1835～1901	間	なし
2	廣池半六	1841～？	直	あり
3	廣池り象	不明	直	あり
4	小川含章	1812～1894	直	あり
5	村岡典嗣	1884～1946	直	なし
6	阿部守太郎	1872～1913	間	あり
7	井上頼圀	1839～1914	直	あり
8	佐藤誠実	1839～1908	直	あり
9	穂積陳重	1855～1926	直	あり
10	飯田武郷	1828～1900	間	なし
11	市川三喜	1886～1970	直	不明
12	猪熊浅麻呂	1870～1945	直	あり
13	上田万年	1867～1937	直	あり
14	内田智雄	1905～1989	直	あり
15	雲照律師	1827～1909	直	あり
16	落合直文	1861～1903	直	不明
17	小幡篤次郎	1842～1905	間	なし
18	寛 克彦	1872～1961	直	あり

整理番号	氏名	生涯	影響関係区分	直接面識有無
19	金沢庄三郎	1872～1967	直	あり
20	木村春太郎	不明	直	あり
21	久米邦武	1839～1931	間、直	不明
22	久米幹文	1828～1894	間	不明
23	黒川真頼	1829～1906	間、直	不明
24	桑原芳樹	1861～1943	直	あり
25	齋藤 実	1858～1936	間	あり
26	嵯峨正作	1853～1890	直	なし
27	飯谷芳郎	1863～1941	直	あり
28	重野安釋	1827～1910	直	なし
29	渋沢栄一	1840～1931	直	あり
30	白鳥庫吉	1865～1942	直	あり
31	瀧川政次郎	1897～1992	間	あり
32	田口卯吉	1855～1905	直	なし
33	田中義能	1872～1946	間	なし
34	坪井正五郎	1863～1913	直	あり
35	富岡謙蔵	1873～1918	直	あり
36	富岡鉄斎	1837～1924	直	あり

整理番号	氏名	生涯	影響関係区分	直接面識有無
37	内藤耻叟	1827～1903	直	なし
38	中西牛郎	1859～1930	直	なし
39	中野金次郎	1882～1957	直	あり
40	中山真之亮	1866～1914	直	あり
41	成瀬仁蔵	1858～1919	間	不明
42	服部宇之吉	1867～1939	間	不明
43	穂積重遠	1883～1951	間	あり
44	松村吉太郎	1868～1952	間	あり
45	三上参次	1865～1939	間、直	不明
46	水野鍊太郎	1868～1949	間	不明
47	元良勇次郎	1858～1912	直	あり
48	諸岡長蔵	1879～1969	間	あり
49	矢納幸吉	？～1914	直	あり
50	山沢為造	1857～1936	間	あり
51	利光三津夫	1927～2009	間	なし
52	六角博通	1835～1900	間	あり
53	渡辺玄包	1833～1905	直	あり
54	和辻哲郎	1889～1960	間	不明

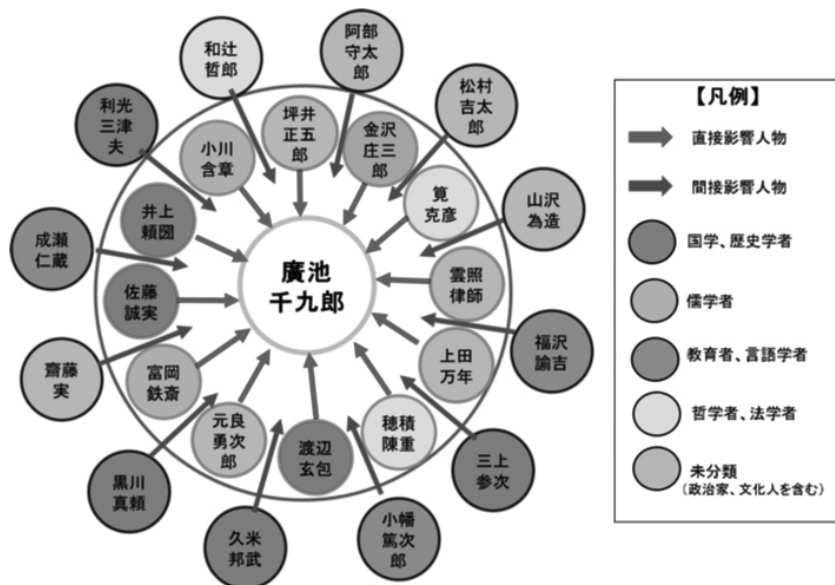
※廣池千九郎の中津時代、京都時代、前期東京時代、伊勢・奈良時代までの関連人物（1866～1915、49歳まで）『廣池千九郎』、『伝記 廣池千九郎』をもとに作成。順不同

参考になっている。次の作業としては、選定した五四名を「国学、歴史学者」「儒学者」「教育者、言語学者」「哲学者、法学者」「未分類（政治家、文化人を含む）」に分類できる人に絞り、さらに廣池千九郎と直接・間接影響関係を矢印で示すことにした。これまでに、特定の人物を取り上げて廣池千九郎との関係を記述したものが多かったことを鑑みると、思想マップの試作版によって、具体的にとどのような人物が廣池千九郎と関係しているのかを示したものとしては十分な意義があると考ええる。その一方で、試作版では関係人物を平面的かつ一方向的に描写していることから、次年度以降は廣池千九郎との影響に関

する双方向性を検討しながらより立体的な構成を目指すこととなった。

次に、二年目までの成果をまとめた「共同研究費報告書」（令和二年九月提出）では、試作版の思想マップとともに、それぞれの共同研究者が選定した六名の関係人物（肖像画付き）についても紹介している。筆者は、廣池千九郎にとって思想の形成のみならず、生涯にわたって（直接・間接的に）影響を与えた人物、さらに学問的には国学、儒学、歴史学者から、井上頼圀（一八三九―一九一四）、富岡鉄斎（一八三七―一九二四）、久米邦武（一八三九―一九三一）を取り上げた。次に、

図表2 廣池千九郎思想関連人物マップ



江島氏は廣池千九郎にとつての広義の教育者（直接・間接的に影響をあたえた人物）で、学問的には、国学、儒学、洋学の師に当たる人物として、佐藤誠実（一八三九—一九〇八）、小川含章（一八一二—一八九四）、福澤諭吉（一八三五—一九〇二）を取り上げている。そして、久禮氏は、他の二人が共通して扱っている国学者との関連で、近代国学と廣池千九郎に関する補足説明を付け加えている。

以上を踏まえて、改めて共同研究者が取り上げた人物と解説内容を、先述の初年度の個別研究と同様、報告書に掲載した内容を転載する形で紹介していく。なお、解説の文中において、廣池千九郎との関係について言及しているところは、傍線で示した。

人物1 【国学者】 井上頼圀（一八三九—一九一四）

【解説】

江戸神田松下町の医者井上頼正の子として生まれる。維新後は皇漢医道御用掛・権少教正・宮内省御用掛・御系譜課勤務・國學院講師、学習院教授、宮内省図書寮編集官などを歴任する。相川景見に歌を学び、また儒学・医学など諸学・諸芸に通じた。一八六一年に平田鋳胤の門人となり、同門の権田直助に皇朝医学を学び、一八八二年には松野勇雄ら同志を糾合して、皇典講究所（國學院の前身）を設立。その講師と

なって教育・運営に尽力した。

廣池は大分に開設された皇典講究所大分分所（明治一六年）を通じて日本の古典を研究し始めたが、その過程で井上との接点があった。京都に出てから出版した『史学普及雑誌』『日本史学新説』『皇室野史』にも、井上と彼の関連人物の影響は顕著である。さらに、『平安通志』『古事類苑』編纂への参加が井上との会談によって決定されたと思われる。後に廣池は正式に井上門下の人となり、東京で一三年間『古事類苑』の編纂に尽力する。

人物2【文人画家・儒学者】富岡鉄斎（一八三七—一九二四）

【解説】

京都の法衣商十一屋伝兵衛富岡雅叙（これのぶ）の次男として生まれる（名は猷輔、後に百鍊、字は無倦）。幼にして国学を大國隆正に、漢学を岩垣月洲に学び、後に陽明学を春日潜庵に、詩文を叡山の僧羅溪慈本に学んだ。絵は大角南耕、窪田雪鷹、小田海仙、浮田一蕙に就いたが、特定の師の系統をひかず独学工夫したと思われる。

二〇代の幕末の動乱期には、「勤王（皇）の志士」たちとの交際の範囲が広がった。三〇代から四〇代の前半にかけて、『称呼私弁』（一八六九）などの著作を出版すると同時に、画

業を続けていた。四五歳の時に京都に帰り、その後は読書と書画の制作に専念する。南画協会の創立（一八九六）に参加、多くの展覧会の審査員、帝室技芸員、帝国美術院会員をつとめた。

廣池との関係については、平田篤胤の門弟であった大國隆正の弟子に鉄斎と渡辺玄包がおり、廣池は渡辺の弟子にあたる。鉄斎は京都時代の廣池を指導している。

人物3【歴史学者】久米邦武（一八三九—一九三一）

【解説】

佐賀藩士久米邦郷の三男として生まれる。一六歳の時、佐賀藩校弘道館に入り、卒業後に尊皇派の「義祭同盟」に参加。二五歳の時に昌平坂学問所で古賀謹一郎に学んだ。その後、弘道館教諭に就任。維新後、太政官政府に仕え、岩具遣外使節に随行。重野安繹と共に「大日本編年史」など国史の編纂に尽力する。一八八八年、帝国大学教授兼臨時編年史編纂委員に就任、重野安繹らとともに修史事業に関与し、日本史研究に近代的歴史学の方法を移植することに努めた。一八九五年に、大隈重信の招きで東京専門学校（現・早稲田大学）に転じ、歴史学者として日本古代史や古文書学を講じた。久米は我が国の古文書学の基礎を築いた人である。

廣池が実証的な研究成果に基づく歴史学に転換し、その普及

を図ろうとして、明治二三年に刊行した『日本史学新説』において、久米は廣池が最も多くの論説を引いた人物の一人である。

人物4【歴史学者】佐藤誠実（一八三九—一九〇八）

【解説】

一八三九（天保一〇）年に江戸浅草の正行寺の第十一世住職佐藤慶の次男として生まれる。九歳で得度するが、その後は和漢の学問の修得に励んだ。一八七二（明治五）年に文部省の編集寮に奉じ、一八八〇年に『古事類苑』の編集掛に就任。その後、東京大学の講師や東京音楽大学の教授を経て、『古事類苑』の事業が神宮司序に移管された一八九五年に編集長に任命。以降『古事類苑』の編纂に従事し、事業終了式の翌年の一九〇八年に逝去。

廣池が佐藤と初めて顔を合わせたのは、一八九五年五月であった。廣池は佐藤の右腕となって全力を尽くし、その結果貴重本『故唐律疏議』を贈呈された。一方で、佐藤は、一八九〇（明治二三）年に師範学校の教科書としてわが国の教育の歩みを初めて叙述した『日本教育史』を刊行。一九〇三年に「修訂」版を出版するが、その「緒言」に「改正増補の挙に就きては、廣池千九郎氏の力を藉ること多しとす」と、廣池の名が挙げられている。

人物5【儒学者】小川含章（一八二二—一八九四）

【解説】

一八二二（文化九）年、日出藩に生まれる。名は弘藏、号を含章と称す。帆足万里に学び、生野学問所（現在の兵庫県生野）に司鐸（校長）として赴任。その後、杵築（きつき）藩や日出藩に出仕。明治維新後の一八七一（明治四）年、杵築に私塾の麗澤館を開く。一八八〇年頃、大分に移転。生野にいた時代に地域の孝行者をまとめた『生野銀山孝義伝』（一八四九）を刊行。旅と酒と釣りと水泳を好んだといわれる。

廣池は師範学校受験の準備のため、一八八三（明治一六）年九月に麗澤館に入塾（一七歳）。半年間をそこで学ぶ。塾生は数百人を数えた。塾生の多くは塾内に起居（小川も）。漢学を主とし、英語、剣術、養蚕を教授し、実学の精神を涵養。廣池は小川から、学問への情熱や学生への教育愛、さらに皇室貢献への意志を見てとり、小川の学恩に報いるべく、一八三五（昭和一〇）年に道徳科学専攻塾を開塾した際に、自らの住居を麗澤館と名付けた。

人物6【教育者】福澤諭吉（一八三五—一九〇二）

【解説】

大分県中津市留守居町（但し出生は大坂）。武士（下士）。適塾にて緒方洪庵に蘭学を学ぶ。一八五八（安政五）年、慶應

義塾を創立。代表作に、『西洋事情』（一八六六初編）『学問のすすめ』（一八七二初編）『文明論之概略』（一八七五）。時事新報の創刊。交詢社を創立。

廣池と福澤の接点は、廣池の一八七九（明治一二）年、中津市学校入学に始まる。中津市学校は慶應義塾の分校とも位置付けられる洋学校。ここで一年少し学ぶ。しかし、福澤との間に直接の面識はなし。間接的な接点として、廣池が『中津歴史』（一八九一）を福澤に送り、福澤がそれを受領したことは史料から確認ができる。廣池はその後の人生で、福澤門下の慶應義塾関係者、中でも中津出身者と多くの接点を持つていく（小幡篤次郎、朝吹英二、鎌田栄吉、和田豊治、本山彦一等）。『中津歴史』では福澤の業績を高く評価するものの、後年は福澤の「独立自尊」に對置する形で自らの「慈悲寛大自己反省」を打ち出す。

以上のように、いずれの人物についても、一般的な歴史人物の紹介に加え、廣池千九郎との関係について言及している（傍線部）ほか、以下に挙げるように、平田派国学、皇典講究所、古事類苑などの補足用語の解説をも掲載しているところは、一般的な人物事典には見られないことから、本研究の特徴であると考ええる。

【補足用語】

※平田派国学（平田学派）

本居宣長没後の門人と自称し、荷田春満、加茂真淵、本居宣長とともに国学四大人の一人である平田篤胤（一七七六一八四三）による古代天皇制を唱える勤王思想。復古神道（平田神道）の大成者であり、幕末の尊王攘夷運動に大きな影響を与えた。その平田学派の思想は、長女の千枝（後のおてう・お長）と結婚し養子となった平田鍊胤（一七九九—一八八〇）に引き継がれる。鉄胤は控えめな性格で奔放ともいえる篤胤の活動をよく補佐し、平田門の伝道者として大きな役割を果たした。平田学派の門人には、直接門人と没後門人がおり、篤胤没年までの門人の数は五五三名、没後明治九（一八七六）年までには三七〇〇人に達していた。

※皇典講究所

明治一五（一八八二）年、東京に設立された皇典研究・神職養成機関。明治二三年に國學院を開校し、国史、国文、国法を攻究する教育機関ができると、廣池はさっそく翌年に弟の長吉、同三年には又治を入学させている。

※『古事類苑』

百科全書。本文一〇〇〇巻。古代から近世までの各時代の制度・文物・社会一般の事項を天・歳時・地など三〇部に分け、基本的文献から原文のまま引用した資料集。廣池が携わ

ったのは、実に一〇〇〇巻のうち二三二巻と約四分の一程度を執筆したとの研究がある。

※「麗澤」

『易経』の一節。「象（しょう）に曰く、麗（つ）ける澤は兌（よろこ）びなり、君子以て朋友と講習す」（並んでいる沢が互いに潤し合う姿は喜ばしい。立派な人間になろうとする者が志を同じくする友と切磋琢磨する姿は素晴らしいとの意）。廣池は、「麗澤とは太陽天に懸りて万物を恵み潤し育つる義なり」と説明。

※「独立自尊」

今日の慶應義塾の教育理念。「心身の独立を全うし、自らその身を尊重して、人たるの品位を辱めざるもの、之を独立自尊の人と云ふ」（「修身要領」第二条）

【補足】近代国学と廣池千九郎

近世後期に生まれた「国学」は、明治維新の精神的源流となったが、維新後はその思想と現実の政治との対立の中で、国学者たちの多くは政府中枢から追われ、学問的にも低調となっていたとされてきた（地方における一例として、島崎藤村がその父の挫折を描いた小説『夜明け前』がある）。

しかし、近年、明治の国家制度の整備における国学者の役割が注目され、彼らの業績は近世の国学とは違う、独自の

「近代国学」として評価されている。『古事類苑』はそのような近代国学の活動であり、廣池千九郎の師である井上頼圀や佐藤誠実も、近代国学者の一人であった。彼ら近代国学者の代表的人物である小中村清矩は、国学の役割について「よい歴史を新たに作り出すこと、そしてその「将来不易の基本と定むべきは、国体のこと」「国体とは、…皇室の尊嚴の本を知り、建国の大体を知て」外国とは大きく違いがあることであると述べている。廣池千九郎が、井上頼圀の示唆を受け、『道徳科学の論文』の基礎においた万世一系の研究も、そのような近代国学の問題意識の延長線上にあるものと言える。

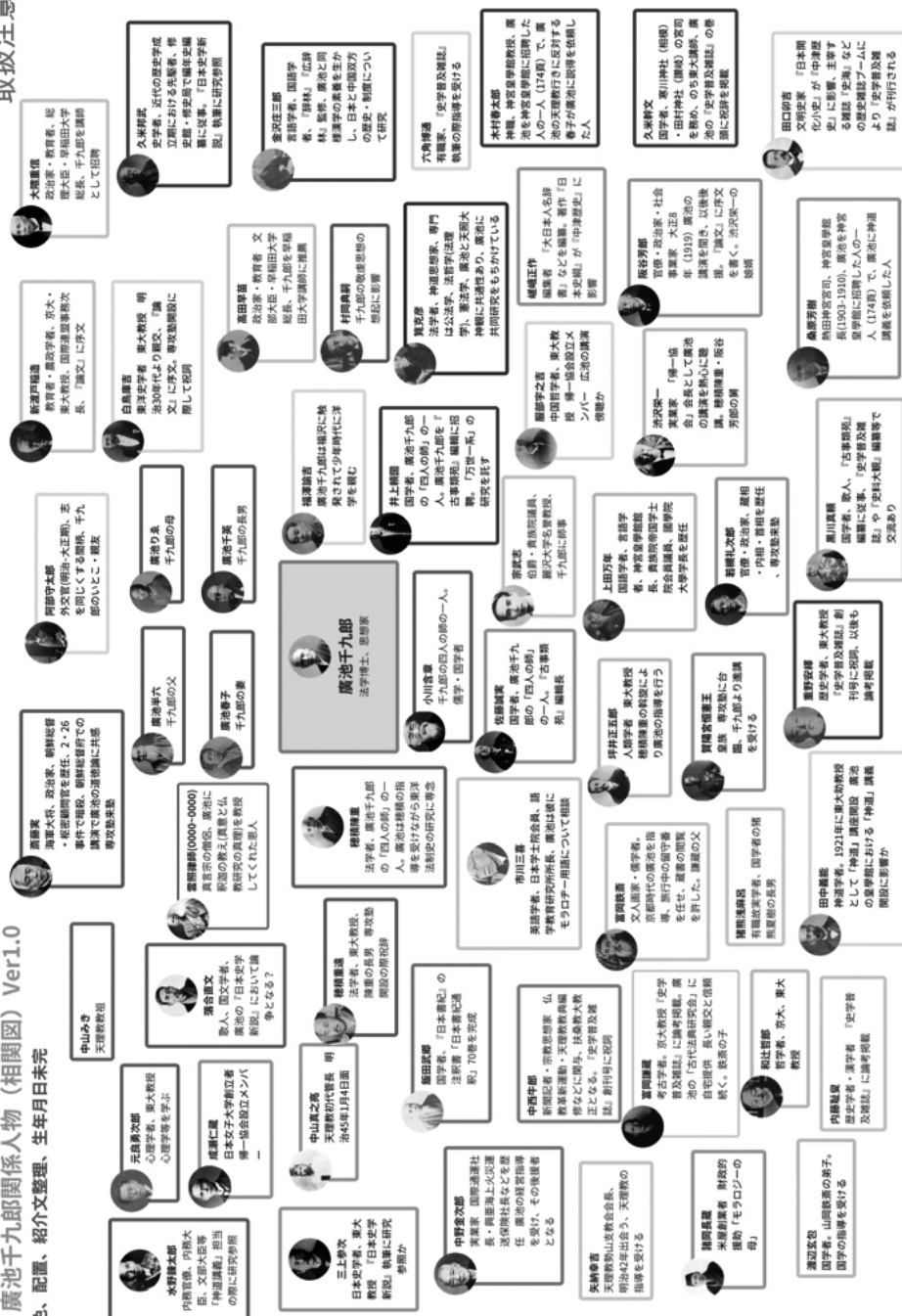
（二）思想マップの構成その2（暫定版の完成まで）

初年度と次年度の成果をもとに、共同研究の三年目にはこれまでの個別研究を進めると同時に、試作版の思想マップでの課題を改善し、暫定版の制作に注力することとなった。まず、完成した暫定版「廣池千九郎関係人物（相関図）Ver1.0」をご覧ください。

図で示したように、暫定版は廣池千九郎を中心に、これまでの調査研究で関係が明らかになっている人物を中心に広がる形をとっている。個別研究では、試作版の作成時に選定した関係人物を対象に、廣池千九郎との接点の有無、その内容を調べて

■ 廣池千九郎關係人物（相關図）Ver1.0
 特色、配置、紹介文整理、生年月日未完

棕色、配置、紹介文整理、生年月日未完



いくことを最優先課題として取り組んだ。暫定版に掲載した人物は、個別研究で検証・検討を経た人物で構成している。

暫定版を試作版と比較すると、違いは一目瞭然である。まず、試作版では関係人物を表にまとめ、廣池千九郎と関係する人物をいくつかの分野に色分けして（二方向的に）示したものであった。一方で、暫定版では、関係人物の顔写真を挿入し、分野を示し、廣池千九郎との関係記述も端的に掲載しており、全体をより明確に示すことができたものと考ええる。しかしながら、新しいソフトの操作に不慣れであったことや、コロナ禍の影響によって、対面での検討・作成ができず、全面リモートで行われたことなどの理由により、作成には想像以上時間がかかってしまい、次年度以降に課題（関係人物の枠色、配置、内容の構成）を残す結果となった。

四 おわりに…課題と展望

これまでに本研究の三年間の取り組みについて概観してきたが、本稿の最後に課題と展望を述べてみたい。

残された課題は多々あるが、なかでも時代の連続性の扱いが挙げられる。

本研究は廣池千九郎の思想形成に影響を与えた人物、制度、社会（時代的背景を考慮）に焦点を当てているが、関係人物の

中には同時代の人に限らないほか、生涯において影響を与えた人、部分的に影響を与えた人も想定される。さらには一方的に関係人物から影響を受けているとは限らず、影響関係が双方向的な人物も含まれており、明確な区分を設ける（棲み分け）ことは困難である。本研究を企画した当初より、そのことは考慮すべき点として認識していた。つまり、人物研究においては、一般的な認識では、仮に師弟関係であっても一方的に受け入れるばかりとは考え難いということである。

しかし、十分認識していたとはいえ、実際に研究を進めるうちに、そのことの重要さや複雑さに気づき、こうした時代の連続性の扱いは、人物とのかかわりの整合性にもかかわる点であるため、さらなる検証作業が必要であることを痛感した次第である。

さらに、当然のことながら、三人の共同研究メンバーが取り組んだ三年間の研究および暫定版の思想マップだけで廣池千九郎の思想的影響を明らかにすることは不十分である。その意味で、今後は残された課題に取り組みながら、廣池千九郎の思想形成に関する研究の継続が求められよう。実際に、共同研究は今も継続している。令和三年度からは代表の固定化を防ぐために（メンバー間で）代表交代制及び、より詳細な人物関係図の作成が可能な相関図作成ソフトの導入、さらには、令和四年度に新たな視点の拡充のための新規メンバーを追加など、共同

研究の目的達成のためにさまざまな工夫や試みを行なっている。それらの工夫による成果は別稿に期待したい。

なお、本稿の最後に、共同研究者の三年間（平成三〇年～令和二年）の研究成果一覧を挙げておく。

【平成三〇年度】

- ・ 冬月律「近代における「神社中心説」と廣池千九郎の「神道論」」研究センターゼミ、平成三〇年九月四日
- ・ 江島顕一「近代国家形成と国民の道徳―井上哲次郎の「国民道徳論」」研究センターゼミ、平成三〇年九月四日
- ・ 久禮旦雄「日本近代における道徳と社会―柳田國男と平泉澄」研究センターゼミ、平成三〇年九月四日

【平成三二年度】

- ・ 久禮旦雄「柳田國男と平泉澄―「自分の言葉で語る」学問を目指して」第三〇回モラロジー研究発表会（大阪大会）、平成三二年二月七日

- ・ 江島顕一「廣池千九郎研究講座」（「大分儒学の伝統と廣池千九郎」、中津記念館講堂。ほか畑毛）平成三〇年十一月二三日～二五日

【令和元年・令和二年度】

- ・ 冬月律・江島顕一「廣池千九郎思想マップ」（シンポジウム5）、第一回道徳科学研究フォーラム、令和二年一月二

六日

- ・ 江島顕一「廣池千九郎研究講座」（「大分の伝統とモラロジー」、中津記念館講堂）、令和二年十一月一日～一日

参考文献（本稿執筆に関するもののみ掲載）

- 橋本富太郎著『廣池千九郎…道徳とは何ぞや』（ミネルヴァ日本評伝選）、ミネルヴァ書房、平成二八年。
- モラロジー研究所編『伝記廣池千九郎』モラロジー研究所、平成三年。
- 国立国会図書館電子展示会「近代日本人の肖像」<https://www.ndl.go.jp/portrait/>、令和四年九月一六日最終閲覧。

